祭神については現在大山祇神、事代主神の二柱となっている。この神社の名前の三島に重点をおけば渡しの神の大山祇神、鴨に重きを見れば事代主神となるのだろう。この近くに溝咋神社が鎮座、『日本書紀』によると事代主神が三島溝杙姫（玉櫛姫）に生ました姫が姫鞴五十鈴姫で、神武天皇の妃となった また三島溝杙姫の父神が三島溝咋耳命、その父神が大山祇神となっており、姫鞴五十鈴姫の両方の祖先神が祭神となっている。 大和王権の成立とこの地方の豪族とは無関係ではないことを物語っているようだ。

社叢は楠木や榎木が多く、樹林保護地区に指定されている。江戸時代には二の鳥居だった鳥居が西側にある。阪神淡路震災で倒壊したが、翌年の平成八年に再建されている。 戦災で消滅した拝殿は昭和二十四年に再建されている。

元の鎮座地は現在の淀川堤防になっている川中島だったそうで、伊予の三島と同様に島であるのは、渡しの神、また造船の神を思わせる。 元禄十年（1697）に遷座している。

この地の神社の摂社は比較的大きい。確認できなかったが石灯籠に三つの山が彫られているとのこと、島は領域でもあり、山とも言える。三島とは三山ともとれるとすると、どこの三山だろうか、やはり大和三山だろうか。香春岳だろうか。

３）三島鴨神社の注連縄について

日本で初めて広域的な統一王国を作った出雲族はインドから来たクナト族である。

ワニを川の神、コブラを森の神として祀り恐れた。この二つの神が合わされて竜神信仰が生まれた。

農耕民族である彼らは、ワラで竜神を作り、木に巻き付けて拝むようになった。

三島鴨神社の注連縄は氏子さん方（注連縄保存会）の手づくりです。

大鳥居の注連縄は両端が巻き付けてあり、本義を伝承する大変貴重な注連縄です。

注連縄で巻き付けた木は、ご神木とされ、伐るのは禁じられた。

水田に水を流すのは山林であり、三島神神社を川中島に創建したのは、川と山森に対する竜神信仰と考えられる。

また、自然との共生の意味で、奪い取った米や樹木に対する命の再生を願う行いが、新たな命を吹き込んだ注連縄（しめなわ）や御神札との暮らしである。

日本ではワニをサメ、コブラをセグロウミヘビに代えられた。

三島鴨神社を含め、出雲系神社には六角形の神紋が多い理由は、セグロウヘビの鱗の形（竜鱗紋）に由来するためである。

セグロウミヘビは、出雲地方では「龍蛇様」と呼ばれて敬われており神の使いとして奉納する神在祭という儀式がある。

三島鴨神社
神紋